慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	冷戦期のソ連外務省：人事面からみた組織の特徴
Sub Title	The Soviet foreign ministry in the cold war period : its personnel recruitment and the institutional structure
Author	横手, 慎二(Yokote, Shinji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1993
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.66, No.12 (1993. 12) ,p.191- 212
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阪埜光男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19931228-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

冷戦期のソ連外務省
——人事面からみた組織の特徴——

横手慎二

はじめに——問題の設定
一　外務人民委員部の粛清
二　新しい人材——制度による補充
三　新しい人材——制度外からの補充
四　冷戦期のソ連外務省——結びに代えて

はじめに——問題の設定

企業や大学などの社会的組織は、その目的に応じて特定の構造をもち、構成員はその内部に組織の機能上必要な知識を蓄積している。組織内部に蓄えられた知識は、マニュアル化されることもあれば、明文化されずに伝統として個人ベースで後続の者に伝えられることもある。こうした知識や伝統は、多くの場合一定の価値判断と方向性を含んでいる。そうした組織内部で共有された知識や伝統によって、組織は構成員に組織の目的や独自性を意識させ、円滑な

機能を確保している。しかし他方で、組織を取り巻く環境の変化によっては、それまで組織に蓄積された知識やそこに組み込まれた構造とはまったく異なる内容の知識や構造が必要だと、構成員もしくは組織の監督者に認識される場合もある。

組織の存続には、前者のように、機能的連続性や伝統の尊重が不可欠である。しかしそれも行きすぎれば、いわゆる「時代の変化」に対応できない危険性が生まれる。逆に後者の場合のように、新たな環境への適応と革新を第一の課題とすると、組織に蓄えられてきた知識や行動規範を破壊し、組織分裂や機能上の混乱をひきおこす危険性がある。一般には、社会的組織は、こうした機能の継続と環境への適応の二つの課題の組合せに意を注いでいるが、自己を取り巻く社会状況によっては、そのバランスを一方に崩した対応をとる場合がある。こうした大きな変動期や極度の安定期での組織の対応の在り方は、その組織の性格や社会との関係を検討する上できわめて貴重な機会を提供する。

本稿は、粛清後のソ連外務省（一九四六年までは外務人民委員部）に即して、その組織的革新の在り方を検討しようとするものである。三〇年代から四〇年代にかけて、ソ連の外務機構は、他の諸組織と同様に、急激な人材の交替を引き起こした。上記の二つの課題に従えば、知識や伝統の伝達よりも時代への適応を重視したのである。そこで、この時期のソ連外務省という組織の性格や社会における在り方を考えるためには、この急激な革新の中で、機能的連続性の保持という課題をどのように判断していたのかが、問われねばならない。ここでは、粛清後、外務省がどのような経験や資格をもった新人たちによって補充されたのかを検討し、そこから、外務機構の組織的革新をすすめた指導部にとって、どのように外交機能の連続性が考えられていたのか、という問題に接近することにする。行論の必要上、まず、三十年代に起こった外交官の粛清について言及しておきたい。

一　外務人民委員部の粛清

既に幾つかの研究によって、一九三〇年代にソ連の外交官が多数逮捕され、三〇年代の末から多くの新人が登用され始めたことはよく知られている。研究の多くは、粛清の研究の延長上に、犠牲となった外交官の確定や外交政策への影響、三〇年代末の政策転換との関わりに注目してきた。論者もかつて、一九八九年九月刊行の『ソ連外務省通報』に掲載された、粛清された外交官の名簿を基にしてこの問題を論じている。そこでは第一に、粛清の規模が三〇年代に外務次官であった者の八割、同時期に大使であった者のほぼ五割に上ること、第二に、粛清の実態には多様な形が見られたこと、第三に、仮説的に、粛清によってソ連外交にきわめて本質的な変化が起こったと判断できることなどを主張した。(1)

その後も旧ソ連では、粛清された外交官の親族からの申し立てなどに基づいて、犠牲者の確定がすすめられてきた。こうした努力によって、上記『ソ連外務省通報』一九九〇年第三号には、一九三七年から三九年に粛清された者一四名の名簿が掲載され、(2)さらに同一九九一年第一号には六二名の名前が加えられた。(3)いずれも、粛清当時は中堅外交官や外務事務官などであり、粛清の広がりをまざまざと示すものとなっている（同時に、初期の犠牲者のリストが身分差別的であったことを暗黙に批判している）。

後者の号には、一九三九年の一月と四月に、当時まだ外務人民委員（外務大臣に当たる）の職にあったリトヴィノフからスターリン、モロトフ、及びマレンコフに当てて送られた二通の手紙も併せて公表された。その内容は、そのまま本稿の観点に関わっており、きわめて重要である。そこで、要点の整理をかねて少し訳出してみたい。まず、粛清の状況であるが、リトヴィノフの一月三日付の手紙によれば、それは次のようである。

「これまで、九つの首都、すなわち、ワシントン、東京、ワルシャワ、ブカレスト、バルセロナ、コヴノ、コペン

ハーゲン、ブタペスト、ソフィアで、全権代表［大使］ポストが空いたままになっている。もしテヘランに、現在のチェルヌィフが戻らなければ、十番目の空きとなる。上記の内、幾つかの首都では、もう一年以上も全権代表がいない。……大使館の参事官や書記官の状況もより良いわけではない。欠員となっているのは、参事官が九、書記官が二二、領事・副領事が三〇、大使館のその他の政治担当者（プレス担当者、アタシェ、領事館書記官）が一六である。若干の全権代表は、そこに担当者が存在しないために（アテネには、全権代表の下に誰一人としていない）、あるいは、大使職の一時的な管理を任せることのできる人間がいないために、中央委員会の決定を遂行するといっても、彼をモスクワに呼ぶことができないのである。わたしはもはや、外務人民委員部の中央機関における重要な担当者の欠員については述べない。ただ八つの部のうち、一つの部だけに任命された部長がおり、残りの七つの部の長は事務取り扱いであると言っておけば十分であろう。外務人民委員部には、特に全権代表部［大使館のこと］には、不可欠の技術要員がいない。我々は最近の郵便でロンドンからいかなる報告も情報も受けなかった。これはそこにタイピストがいないためである。(4)」

先に挙げた粛清の名簿、その他の資料から見て、おそらく、この内容は事態をかなり正確に伝えているものと思われる。凄まじい規模の粛清が急速に進行したのである。

上記訳出部分でも少し触れられているが、このような大規模の粛清は、当然ながら、外務機能に支障を引き起こさざるを得なかった。外交実務の責任者であったリトヴィノフはこの点に関し、次のように率直にスターリンに不満を訴えている。

「長期にわたって、大使館や公使館の長に代理大使を留めておくことは、政治的意義を帯び、不満足な外交関係の結果と解釈されよう。わたしは、ワルシャワ、ブカレスト、東京に全権代表が存在しないことは特にわが国の関係に具合の悪い、有害なことと考える。ポーランドとの接近が認められるようになった後、同国の新聞は、接近の必然的

帰結として、ワルシャワへの全権代表の差し迫った任命について報じている。ブカレストに全権代表がいないために、内政ばかりか対外関係の分野でも、我々はルーマニアで何が起こっているか、まったく情報をもっていない。日本とは、日本の大使を通じて交渉しなければならない。というのは、わが国の代理大使は外務大臣にほとんど近付けないからである。[5]」

外務機構の受けた痛手は、以上にとどまらなかった。手紙は次のようにも述べている。

「少なからぬ担当者が、警戒のため、党委員会によって党から排除されている。他の者は、秘密の仕事から遠ざけられている（いわゆる『機密からの排除を受けている』のである）。その結果として彼らは、外務人民委員部にとっては、その価値をまったく失っている。内務人民委員部第七部の措置によるものである。[6]」

まさに、機能面で、外務人民委員部は麻痺状態にあったのである。こうした状況で、外務人民委員部が組織として蓄えていた知識や伝統の保持や伝達が困難になったのは、当然である。手紙は、次のように新たな人材による補充の問題にも言及している。

「近年養成所で我々が育成した交替組も、同様に外地で働く機会を得ていない。新しい適任の要員を、我々は最近中央委員会から受けていない。養成所に集められた新しい要員が仕事につくことができるのは、養成所の終了後の一年半から二年たってからある。[7]」

四月五日付の手紙の末尾でも、リトヴィノフは、同様の問題に言及している。

「旧来のスタッフと新しいそれの結合の原則は、外務人民委員部にも適用されねばならないと考える。しかしながら、中央委員会の指導的党機関部は、現在まで、旧来のスタッフに対して、彼らに対する明白な嫌疑が何もないにもかかわらず、外務人民委員部の何らかの責任ある活動につくことをまったく許していない。問題の早急な解決を望む。[8]」

つまりリトヴィノフの手紙によれば、粛清は外交実務の異様な麻痺をものともせず進行していたのであり、彼の見るかぎり、それは補充の問題を無視し、外務機能の通常の遂行や、同組織のもつ知識の伝承を不可能にしていた。しかも、この革新は、この時点までは、こうした問題を配慮すべき機関、つまり党組織や中央委員会の指導的党機関部の活動も停止、もしくは萎縮させる形でなされているというのである。リトヴィノフがスターリンにこうした手紙を書いたのは、彼には、指導部が内務人民委員部の活動による外務畑の混乱を知らないか、あるいは問題の重要性を理解していないと見えたからであろう。

言うまでもなく、こうした状況がそのまま続くはずはなかった。確かに、リトヴィノフ自身は二度目の手紙を送った一カ月後に外務人民委員から解任され、その後も粛清が続いた。つまり、それまでの同部に蓄えられた知識は甚だしく軽視されたのであるが、他方では外務機能を中断することなく遂行するため、新たな人材が急速に集められたのである。

従来、粛清後の人事という問題は、世代論を除けば、ほとんど検討されずにきたが、冷戦期の外交がこの時選抜された新人によって担われたこと、しかもその時期に戦後のソ連外務省の骨格が定まったことを考えれば、見逃すことのできない重要な論点である。世代論で言えば、これまで一般的に、大規模な粛清によって、革命前までの亡命経験をもった外交官の時代が終わり、新しい、閉鎖志向の強い「モロトフ学派」の外交官たちが登場したということで済まされてきた。[9] しかし、こうした概括は多くの問題を含んでいた。

第一に、この時期に新たに外交官に選抜された人間たちの多様性が見逃されている。論者が以前に簡単に指摘したごとく、[10] 彼らはけっして一様な人間たちではなかった。登用された新人外交官たちの中には、この概括から想定されるような二〇代から三〇代の若い世代の者ばかりではなく、ヴィシンスキーやロゾフスキーのように、これまでに外務人民委員部以外の組織でソ連の対外関係に関わっていた中年層が含まれていた。

第二に、特にその中年層の中からヴィシンスキーが一九四九年に外務大臣へ昇進するのであり、その前年には、モロトフの夫人が、関わっていたユダヤ人反ファシスト委員会解散を受けて逮捕されるという事件が起こっていた。[11] つまり、モロトフも、一貫してスターリンの信頼を受けていたわけではなく、彼の影響下で戦後の外務省の基礎が築かれたと言うには、事態はかなり複雑な過程をたどったのである。

第三に、粛清後の外務機構を取り巻く環境は、けっして安定していたわけではなく、戦争と冷戦という状況にあった。そのため、外務機構にしても、粛清の後始末ばかりではなく、他の要請にも応えねばならかった。モロトフ外相が、世界の重要な問題でソ連を抜きにして解決できるものはないと豪語したのは、一九四六年二月のことであり、[12] それは当然ながら飛躍的に外務機構を膨張させることを意味し、組織の革新は縮小と膨張を繰り返す、混乱に満ちた過程とならざるをえなかったのである。

それでは、この時どのような人材が外務機構に集められたのであろうか。近年知り得るようになった資料を下に、可能なかぎりでこの問題を検討してみたい。

二　新しい人材——制度による補充

まず言及しておくべきは、戦間期に存在した外交官を補充するための制度である。一般的に、ソ連外務省の組織的な人材の育成は、第二次大戦末期のモスクワ国際関係大学の創設と結びつけられがちである。確かに、戦後同大学が外交官の養成に果たした役割は無視できない。しかし、ソ連指導部はそれより一〇年も前の一九三四年秋に、つまり戦間期で外交関係が最も拡大した時に、新しい人材を育成する仕事に着手していた。[13] この時までに革命前の亡命経験者からでは補充は困難になっていたのである。新設の学校は、外交官・領事養成学校と呼ばれ、外務人民委員部と同

じ建物の中に、しかもその管轄下に設置された。同校に最初に登録された学生は四〇名であり、その入学資格は既に高等教育を修め、実務経験をもつことであった。[14] 二年間の履修期間に、学生は、基本的な国際政治、歴史、経済、法律などの科目の他に、フランス語もしくは英語と、それ以外の西洋言語の基礎も学ばねばならなかった。[15] この課題は、既にかなり年齢の高い学生には相当に厳しかったものと思われる。一九三四年入学の第一期生で二年後に卒業できたのは三〇名であり、そのうち外務人民委員部付属の高等外交学校へと改組された。この改組の背景に、外交官の粛清と第二次大戦へと至る国際関係の緊迫化があったことは確かである。いずれにせよ、同校は以前よりさらに実践的課題を掲げ、ソ連外交学の基礎と外国語を習得して、国際舞台においてソ連の国益を積極的に擁護できる人材を育成することを目指した。ここでは、履修期間を二年間とする西洋部と三年間の東洋部の二つの部門（後に学部とされる）が置かれた。新たに設置された東洋部の履修が長いのは、東洋言語の学習がより困難であると見られたためであろう。ソ連はまもなく戦争へ突入し、同校の教師や生徒も多数が戦場へと赴いたが、学校自体は活動を閉じることはなかった。[17]

同校の入学者と卒業生の名簿は存在しないので、彼らの姿をとらえるためには、知られる限りの例を参照して推測する以外にない。まず、卒業生でその後外交官として活躍した人物を挙げてみよう。最初に、一九三九年の改組以前の卒業生としては、戦時中の駐イギリス全権代表で、戦後は次官、スウェーデン大使などを歴任したグーセフ（一九〇五年生まれ）[18]、戦時中の駐日全権代表で、戦後は次官、駐イギリス大使、国連代表部大臣を歴任したマリク（一九〇六年生まれ）[18]、戦時中に中国のウルムチ駐在総領事で、戦後は次官、駐東ドイツ大使などを歴任したプーシキン（一九〇九年生まれ）[18] などがいる。

改組以降の卒業生としては、戦後五〇年代からアイスランドとキプロス駐在の大使を歴任したエルモーシン（一九〇七年生まれ）[19]、同じく戦後の五〇年代からスーダンとエチオピア駐在の大使を歴任したチェプロフ（一九〇九年生ま

れ)[19]、戦後六〇年代から駐イギリス大使や次官、駐キプロス大使を歴任したソルダートフ(一九一五年生まれ)[19]がいる。

彼らが外交官の養成所に入る以前の経歴は、どのようなものであったか、この点は、特に資料が乏しいので、経歴が比較的詳しくわかる者について検討することにしたい。

まず、アラブ首長国連邦やイラン大使を歴任したウラジーミル・エロフェーエフの経歴が参考になる[20]。彼は一九〇九年生まれで、一九三八年から三九年にかけて一年だけ外交官・領事養成学校に通った。卒業後すぐに領事部の部長代理、部長となり、翌年には、在トルコ全権代表部(大使館のこと)の参事官として転出した事実からみて、明らかに凄まじい速さで進行した粛清が、予期せぬ人員の欠乏を引き起こし、彼に二年間という本来の学習時間を許さなかったのである。ともあれ、その入学以前の経歴は次のようになる。

一九〇九年モスクワ生まれ。社会的地位は職員。ロシア人。一九三八年から党員。
一九二五年から二六年まで、モスクワ機械電気技術学校教習所で仕上げ工。
一九二六年から二九年まで、モスクワ市で映写技師。
一九二九年から三〇年まで、モスクワ州クンツェヴォで映写技師。
一九三〇年から三一年まで、共産主義アカデミー付属高度神経活動研究所で電気技師。
一九三一年から三三年まで、ペルミ航空技術者パイロット学校受講生。
一九三三年から三五年まで、全連邦実験医学研究所の機械設計者。
一九三五年から三八年まで、モスクワ機械器具大学の学生。

こうした経歴は、この人物の外交官養成学校への入学が、親族のコネなどによってではなく、自身の学習意欲、社会的上昇志向によっていたということを示している(途中でペルミ航空技術者パイロット学校受講生となっているが、これは珍しいことではなく、三〇年代のソ連の若者の間で、パイロットになりたいという希望は広範に広まっていた)。一九三八年に

党員となっている事実も、彼の上昇志向を確認している。第二に注目すべきは、経歴からみて彼は入学以前に外国へ行った経験がまったくないという事実である（この点は履歴書に条項があり、明白に確認される）。三九年に養成学校に入るまで、外交官になることを予測させるものは何もなかったのである。第三に注目すべきは、既に養成学校に入る以前に大学で三年間の学習をしており、学歴が高度であることである。

それでは、高等外交学校に改組された後の同校の入学者はどうであろうか。一九四四年から四六年にかけて同校で学んだコンスタンチン・アヴラーモフの経歴を見てみよう。[21]

一九一五年ロストフ州ヴェルフネ・ドネツコイ地区ソロンツ分村（フートル）生まれ。社会的地位は職員。ロシア人。一九四〇年から党員。

一九三〇年から三三年まで、ロストフ州ノヴォチェルカッスク市教育技術学校学生。

一九三三年から三四年まで、ロストフ州の農民青年学校教師。

一九三四年から三九年まで、モスクワ歴史・哲学・文学大学学生。

一九三九年から四三年まで、沿海地方で水兵。政治管理部軍事政治養成所の受講生。

一九四三年から四四年まで、北太平洋艦隊政治部講師。

以上の経歴から、改組後に入校したアヴラーモフについても、第一に強烈な学習意欲あるいは社会的上昇志向をもつこと、第二に、外国との接触が皆無であること、第三に、高度な学歴の保持者であることという三点は当てはまると言えよう。

同様の事実は、先にあげた著名な外交官のうちで比較的経歴のわかるプーシキンについても言える。プーシキンは、一九〇九年二月にスモレンスク州の村で生まれた。早くから父を失っていたので、貧困の中で農業学校を卒え、一九二七年にプレハーノフ名称モスクワ国民経済大学に入学した。その後、一時故郷に帰らざるを得ず、三一年に同大学

を卒業した。三五年まで、ノヴォシビルスクとモスクワで経済専門家として働いたのちに、外交官の養成学校に入った。アルヒーフ資料に基づく紹介は、彼が農村においてコムソモール細胞を組織する「戦闘的な指導者」であったと述べているので、彼も早くから党と自己を一体化していたのである。[22] しかも、やはり養成学校入学以前には外交官になることを予測させるものは何もなく、その時までに高度な学歴を有していたのである。

以上の点は、判明した限りすべての外交官養成学校の卒業生について言えるのである。まず学歴の点では、モスクワ航空大学や、モスクワ法科大学、クルプスカヤ名称教育アカデミー、レニングラード軍事機械大学などの卒業生、もしくは一部が中退生であり、入党時期も、学校の入学前か卒業一年以内に集中している。中には、僅かながらさして実務経験があるように思えない者もいるが、概して職歴は豊富である。その中に、彼らが職業として外交官を選択した理由を示唆するものはない。他方で、冷戦期には外国人と接する外交官は危険性の高い職業であり、多くの青年を引き付けるほど魅力があったとは思われない。外国への強い関心か社会的上昇志向以外に、入学の動機は考えにくいのである。

明らかに、こうした人物が自国の外交について具体的知識を得たとすれば、それは養成学校入学後か外務人民委員部で実務についてからであったはずである。つまり、そこでの学習がきわめて大きな意味をもっていたのである。それはどのようなものであったのであろうか。一九三六年に外務人民委員部に入ったローシチンは、学校では専門家の講義の他に、現役の外交官によるものもあったと回想している。[23] こうした講義は、高度の学歴を有するが、外交についてはほとんど何も知らなかった学生にその実態を知らせる上できわめて有益であったはずである。しかし次々にその現役の外交官が逮捕されている状況では、講義がどれほど中身のあるものであったのかきわめて疑わしい。知識の伝達という文脈では、粛清された側によってなされている次のような証言の方が真実味をもっている。

「わたしが新聞部長のポストについたとき［一九三七年七月］、外交官養成の短期コースを終えたか、終えつつある

若い新人の一団に出会った。こうした若者たちは、以前からの職員を、彼らのポストが欲しくて、中傷し、追い出していた。彼らが現在のジダーノフ通りのビヤホールに集まり、今度は誰を中傷するか決めていたのはよく知られているし、実際彼らもそのことを語っていた。厚顔な誹謗をした出世主義者は、大部分がモロトフによって厚く報われた。ジダーノフ通りのビヤホールの常連の中から、アルカージエフ、コロストィレフ、マリク、ツァラプキン、グーセフ、ポッツェーロフのように大使が生まれたのである（もちろん、彼らの中には言葉を勉強し、専門的経験を身につけた者も若干あった）。わたしは関わりがあった者を挙げたので、他にも名を知らしめた者がいた。[24]」

つまりこの証言によれば、三〇年代後半に外交官養成学校で育ってきた新人たちの中には、先任者から学ぶ姿勢をもたないばかりか、彼らを公然と批判する（中傷する）者がいたというのである。学校や外務人民委員部がこうした状況に置かれていながら、そこで先任者から後進の者へ外交の実態を伝える雰囲気があったとは想像しにくい。一九四〇年以降になれば、粛清の波も収まり、この状況はある程度改善されたかもしれない。しかし、その時には、戦時から冷戦の開始時期にあたり極度に人員と時間が不足していたため、[25]学校では語学以外の学習にさして時間は割かれなくなっていたと思われる。

以上から、入学前に高度な学歴をもった青年たちが、この学校で語学以外の専門知識や外務人民委員部に蓄積されていた知識を得ていた可能性は乏しく、なされたとすれば、それは粛清の波が収まって、ともかく入部後数年の人間が集まった戦時以降の外務人民委員部（外務省）においてであったろうという結論になる。それでは、次に外交官養成学校以外のルートからどのような人々が集められていたのか見てみよう。

三　新しい人材——制度外からの補充

粛清とその後の組織拡大による外交官の不足は、正規の育成機関によって補充できなかった。多様な分野からさまざまな人々を集めざるをえなかったのである。

まず第一に、そこには、先に言及したごとく中年層が集められた。たとえば、一八八三年生まれのヴィシンスキーは、一九一三年にキエフ大学法学部を卒業し、一九四〇年に外務次官になるまで、モスクワ裁判を始め、外国と関連をもつ高度に政治的な裁判に検事として参加した。結果として外国でも悪名が高い上に、彼は革命前にメンシェヴィキとして活躍していたので[26]、事態によってはいつでも交替される可能性をもっていた。

一八八五年に生まれ、一九一五年にペテルブルグ大学法学部を卒業したセルゲイ・カフタラーゼも、不安定な状況で外交官となった人物である。彼は一九四一年五月に外務人民委員部中東部の部長となったが、二〇年代にも中東とザカフカースを専門とする外交官として働いた経歴があり、その時にはザカフカースの連邦化問題でスターリンと対立するグループに属していた[27]。四一年の復帰は、当時近東部の管轄が一〇ヵ国に及ぶようになり、同部が分割された結果であった[28]。人員の決定的不足という事態に、スターリンは、一九二七年から四〇年まで党籍を剝脱されていた男の外交官への復帰を許したものと見られる。

このグループを少し広げれば、一八九八年生まれで、一九三九年春に内務人民委員部の外事課長から外務人民委員部の次官となったデカノゾフ[29]、同じく一八九八年生まれでタス通信員から四〇年五月に外務人民委員新聞部長となったパリグーノフ[30]、一八七八年生まれで、二〇年代から三〇年代にかけて国際労働組合連合（プロフィンテルン）の議長として活躍し、三九年に外務次官となったロゾフスキー[31]、一九〇五年生まれで内務人民委員部の中国専門のエージェントとして働き、在中国大使館付き武官から三九年に全権代表（大使）、四七年からアメリカ駐在大使となったパニュ

ーシキン[32]などを含めることができよう。

ヴィシンスキー以下の者に共通するのは、正規の外交官になるまでに広い意味での対外関係に関わった経験をもつという点である。この経歴から見て、彼らが、粛清を免れた先任の外交官より、それまでの外交実務に関して事務引継ぎを受けたということは考えられない。また、パニューシキンを除けば、年齢及び入部後の役職から見て、粛清による人事の穴を応急的に埋める目的で集められたのであろう。

第二に、東洋言語の専門家として外務人民委員部に加わった者たちを、一つの集団としてまとめることができよう。まずその代表格として、一九一一年に生まれ、中国専門家として活躍したイワン・クルジュコーフを挙げることができる[33]。その経歴で目に付くのは、外務人民委員部に入る一九三六年まで、モスクワ東洋学大学の学生であったという事実である。彼はこれ以外にも高等外交学校の夜間部過程も卒業しているが、それは既に外交官となった一九四六年のことである（夜間部入学時期は不明）。

一九〇二年生まれのグリゴーリー・ザイツェフも、一九二七年から三〇年までモスクワ東洋学大学の学生であった。彼はその後、モスクワ農業研究所研究員、赤色教授学院受講生、中央委員会付属党組織者高等学校受講生、ゴスプラン勤務、軍コミッサール等を経た後の一九四四年になって外交官となった。入部後すぐにイラク公使となった[34]。

一九三八年五月に外務人民委員部に入り、トルコ、イラン、アフガニスタンを管轄する第一東洋部で勤務を始めたエヌ・ノヴィコフもこのグループの一員として挙げることができる。彼は一九三〇年にレニングラード東洋学大学を卒業した後も、学問を志して赤色教授学院などで学んでいた。入部前にトルコへの旅行経験ももっていた[35]。

さらにこのグループとしては、一九一八年生まれで、レニングラード哲学・歴史・文学・言語学大学の言語学部で中国を研究し、一九三九年から外務人民委員部にはいったチフヴィンスキー[36]、一九一二年生まれで、モスクワ東洋学大学で学び、一九三九年に外務人民委員部入りしたフェドレンコ[37]、同じくモスクワ東洋学大学で学び、一九四〇年か

ら外交官となったアディエルハーエフが含まれよう。[38] このリストから見て、東洋語グループは外交官養成学校の成立や組織変化に関わりなく、一貫して別のルートを通って生み出されていたのである。もともと専攻する学生が限られていた上に、語学の難易度が高かったからであろう。彼らが、その出身による横の繋がりをもっていたとは言えない。しかしその内の何人かが独立心を発揮して外交官をやめたのは、その専門性と無関係ではないであろう。

最後に以上のどのグループにも入らない一団がある。このグループに属するグロムイコ（一九〇九年生まれで、一九三九年に入部）については比較的資料が揃っていたので、かつて論者がその経歴上の特徴をまとめている。[39] それは、第一に、入部時期が一九三九年から一九四一年に集中しており、第二に、その時期に年齢が二〇代末から三〇代半ばに達しており、第三に、公的イデオロギーの受容が明白であり、第四に、大学もしくは大学院で学習した高度な学歴を有しており、第五に、入部までに一定の語学力をもっていること、第六に、外交官になるための学問上の用意はまったくなされていないまま、外務人民委員部にはいっていることである。同様の特徴をもつ外交官として、一九一一年生まれで一九三九年に入部したセミョーノフ（後の東ドイツ及び西ドイツ大使）、[40] 一九〇〇年生まれで一九三九年に入部したボゴモロフ（後の次官、フランス大使）、[41] 一九一二年生まれで一九三九年に入部したラヴリシェフ（後のトルコ大使、ベトナム大使）[42] などがいる。

資料の不足から、上記の六つのすべての点で同じと確認ができるわけではないが、ほぼ同様と推測される外交官として、一九〇三年生まれで、電気技術大学大学院生を卒え、一九三九年に入部したソボレフ（後のポーランド大使、次官）、[43] 一九一一年生まれでモスクワ外国語大学を卒業し一九四〇年に入部したニコライ・フョードロフ、[44] 一九〇八年生まれでレニングラード共産主義政治啓蒙大学を卒業し、一九四〇年に入部したスズダリョフ（後の北朝鮮大使）、[45] 一九〇二年生まれで高級共産主義啓蒙大学大学院生を経て、一九四一年に入部したゾーリン（後の次官、チャド及びカメルーン大使）[46] などがいる。

ところで、その他の冷戦期のソ連外交官はどのような特徴をもっていたであろうか。当然ながら、経歴上グロムイコと同じように、外交官養成学校出身でも、特殊な対外関係の経験や東洋言語という特殊な語学能力をもつわけでもない外交官は、けっして一九三九年前後に入部した者に限られなかった。まさにこの点にこそ、これまでの分類のどこにも属さない人々の際立った特色があったと言える。つまり、このグループでは、高等外交学校の卒業生や東洋言語専攻生の場合とは異なり、一九四一年から一九四三年までに入部した者がほとんど見られず、資料的に確認できる者は戦後に入部しているのである。

たとえば、一九一二年生まれで、一九三九年にバウマン名称高等技術大学を卒業し、四六年に入部したコブシコ、[47]一九一九年生まれで、ハバロフスク鉄道技師学校学生及び党高等学校受講生を経て、一九四五年に入部したグラバーリ、[48]一九〇五年生まれで、赤色教授要員養成大学と世界経済世界政治研究所学生を経て、タス特派員から一九四六年に入部したカリャーキン[49]などを挙げることができる。

以上の人物の経歴からも明らかなように、このグループでは基本的に年齢は問題にならない。グロムイコよりも年上のカリャーキンが、学歴では遜色がないにもかかわらず、戦後に二等書記官という低いランクの外交官となっているのである。（グロムイコは大使になっていた。）その理由は、明らかにカリャーキンがタス特派員として滞在した北欧において、外交官として働ける人材が極度に不足していたからである。一般大学の卒業生の外交官への登用が、粛清で極度に外交官が不足していた一九三九年前後と、戦争が終わり飛躍的に外交官を増員しなければならなくなった一九四五年前後に集中しているのは、同じ理由から説明できよう。こうした人物たちが、外交官としての知識を身につけたのは、外務人民委員部（四六年から外務省）に入ってからであることは疑問の余地がなかった。

以上が、資料を通して確認できる冷戦期のソ連外交官の姿である。それでは最後に、こうした外交官の集まる外務省という組織の機能的連続性という問題を考察したい。

四　冷戦期のソ連外務省——結びに代えて

西側の観察では、冷戦期のソ連外務省はどこにも隙のない一枚岩的組織と思われていたし、現在もそうした評価がまかり通っている。しかし、前節までに見てきたごとく、人事面から見るかぎり、それは一枚岩どころではなかった。際立って多様な人々からなる組織であったのである。そこでは、キャリア組とノンキャリア組を分けて募集する日本の外務省のような区別がなかった分だけ、出身大学が偏るということもなかった。きわめて多様な教育組織を通した、教養も経歴も異なり、入部（入省）時期と年齢の対応しない人間が集められたのである。彼らの育成に計画らしい計画などなかった。そのほとんどは、偶然に近い形で外交官として登用されたのであり、そのときまで外交に関する格別な知識ももたず、その意味でもまとまりを欠いていたのである。

そうした人間たちに一定の専門知識を与える上で中心となった機関が、外交官・領事養成学校（一九三九年から高等外交学校）であった。しかし、その役割はきわめて限定されたものであった。何よりも、外交官がすべてそこで学んだわけではなく、しかも、見てきたごとく、そこでソ連外交の抱える問題が先任者によって講義された可能性はきわめて乏しかった。他の、東洋言語を専門とする者たち、あるいは、入用な時期になると偶然のように登用された、中年、青年の一般大学のみの出身者は、まして外交について深い知識などもっていたはずはなかった。彼らのほとんどは、職場においても事柄に詳しい者と会うことがなく、実践を通して何が問題であるか一から学ばねばならなかったのである。換言すれば、彼らには、個人ベースでそれまで組織内部に蓄えられていた知識や伝統が伝達されなかったと思われるのである。彼らにできることは、せいぜいのところ、彼らより数年前に入った上司と相談することであった。それでも、国際関係の網の中にソ連という国家がある以上、外交という機能を止めることはできなかった。

この結果、粛清後のソ連外交官に課せられた課題はきわめて苛酷であった。ほとんど事務の引継ぎも受けずに、実

践経験の乏しい外国語を駆使して、しばしば複雑な性格をもつ国際問題を討議しなければならなかったのである。そうした事情は、当然次のような疑問を提起することになる。つまり、しばしば冷戦期のソ連外交官は、些細な問題までその場で決定せず、上司の判断を待って回答したと言われるが、はたしてそれが従来言われてきたごとく、上からの鉄の統制の結果であったのか、あるいは本当に担当した外交官が事態を理解していなかった結果であったのか、という疑問である。この問題はあれこれのソ連外交史上の問題を理解するためだけでなく、何よりも対象とするソ連という国家の社会体制の性格を考える上で、決定的な意味をもっているのである。

ところで、組織に属する個人レベルで、蓄えた知識の引継ぎができなくなるほど、外務機構が変わってしまっても、なお組織として機能不全に陥ることなく、ともかくも最小限の懸案を処理することができたのは、第一に、トップ・レベルでの人員の継続性がはかられたからであった。モロトフは、三〇年代から外交を監督しており、三九年から正式に外務人民委員となったし、ベテラン外交官のマイスキーは駐イギリス大使として残り続け、リトヴィノフも必要になると、駐アメリカ大使として復帰したのである。

しかしそれ以上に本質的意味をもっていたのは、国家の指導部に強大な人事権が与えられていたことであった。この人事権を行使して、スターリンたちは一度弱めた組織の機能を急速に回復させるために、きわめて学歴の高い人間たち――この点こそ、この時期登用された外交官に唯一共通していた特徴であった[50]――を集めることができたのである。組織の監督者がもつ、社会の人的資源に対する強大な支配力と彼らに選抜される高学歴層が一定程度存在しなければ、懸案の事項に対する自他の見解を対比し、その接点を見いだして処理していく作業が滞り、ソ連の国際社会における孤立化は実際以上に進んだであろう。

けっして多くはない高等教育の修了者の中から、外交の分野にのみ、年齢をさして問題とせず、人文科学や社会科学の専攻者ばかりではなく、本来は国内の相応の分野で使われるべき理系の大学の出身者まで登用したのは、明らか

にスターリンとモロトフが、この分野の専門性と重要性を認めていたからに他ならなかった。外交という仕事の性格の故に、彼らはなりふり構わず、きわめて高学歴の人間を集めることを余儀なくされたのである。登用された外交官は、少なくとも担当することになった問題について、わずかな時間のうちにその本質を外国語の文書と会話によって把握し、しかも、相手に自国側の綻びをみせないよう努めねばならなかった。それは並みの能力の人間にできる仕事ではなかった。

スターリン指導部は、たんに学歴が高い者を集めるだけで、外務機能の回復がはかれるとは考えなかった。彼らは、急速度に外務機能を回復し、さらにその円滑な遂行をはかるために、中年採用組を除き、ほとんどすべての新入り外交官を地域の専門家として育成することを目指したのである。たとえばグロムイコは、新人の時からアメリカを担当し、一九三九年から一九四八年まで、最初はアメリカ大使として、引き続き国連大使として同国に滞在したのである。この方針は、一九四四年に本格的に外交官を育成するためにモスクワ国際関係大学を（正確には、一九四三年にモスクワ大学の国際関係学部として）設立した際にも守られた。そこでは各国別に専門家の養成がはかられたのである。[51]

スターリンたちは、ジェネラリストを育成しようとはしなかった。この点で興味深いのは、外務省内ではともかくもジェネラリスト的な機能をはたす人間を次官以上と定めて、彼らに、入ったばかりの若手数人からなる秘書団がつけられたことである。こうして、タコ壺化した地域専門家の知識をプールし、争点間の連携を確保する仕組みを作り出したのである。問題を細分化し、個別にその解決をはかる方法は、比較的多数の人間が動員できる場合にはきわめて有効であった。しかし、それは二つの問題を提起することになった。第一に、下部に問題の最終的処理を委ねないのであれば、問題と問題の最終的総合をはかる人間は、超人的な仕事を引き受けざるをえなかった。モロトフの秘書官となった新人りの外交官たちによる回想は、この点を明白に示していた。[52] 第二に、専門家として地域の情報を集める人間と、総合的判断に立って最終的に政策の決定を下す人間との役割分担を固定化したことである。[53] 粛清後すぐに

入部し、早くからアメリカという最大の相手国を担当したグロムイコは、この特色ある組織の恩恵を十分に受けて、次官から外務大臣へと急速に昇進していくのである。

(1) 拙稿「外交官の粛清とソ連外交」原暉之・藤本和貴夫編『危機の「社会主義」ソ連』（社会評論社、一九九一年）三一八―三四二ページ。
(2) Вестник Министерства иностранных дел СССР, 1990, n. 3,c. 38.
(3) Там же, 1991, n. 1, c. 37.
(4) Там же, c. 38.
(5) Там же.
(6) Там же.
(7) Там же, c. 37-38.
(8) Там же, c. 40.
(9) W. Hayter, Russia and the World, London, 1970, pp. 31-32., K. von Beyme, The Soviet Union in World Politics, Aldershot, 1987, p. 20.
(10) 拙稿「形成期のグロムイコ　一九〇九―一九四五」『スラヴ研究』第三六号（一九八九年）五三―五四ページ。以下「形成期のグロムイコ」と書く。
(11) В. Соколов, Наркоминдел, Вячеслав Молотов, Международная жизнь, май, 1991, c. 109-110.
(12) 拙稿「形成期のグロムイコ」。六八―六九ページ。
(13) A.F. Neymann, The Formation and Administration of Soviet Foreign Policy, in S.N. Harper (ed.) The Soviet Union and World Ploblems, Chicago, 1935, p. 230.
(14) A. Roshchin, Soviet Prewar Diplomacy, International Affairs, Dec. 1987, p. 113.
(15) Л. И. Музалевский, Дипломатической академии МИД СССР, c. 335, Дипломатический вестник, 1984, c. 335.
(16) А. Рощин, Парижские контрасты середины 30-х, Международная жизнь, сент. 1991, c. 137.
(17) Л. И. Музалевский, указ. статья, c. 335-336.
(18) Дипломатический словарь, 1-ое изд. М., 1948-1950, 及び同 4-ое изг. М., 1984-1986. の当該個所。

(19) Л. И. Музалевский, указ. статья, с. 335. と Дипломатический словарь, 4-ое изд.

(20) ЦХСД, ф. 4 Оп. 9 П. 51/185 гс. дес. 16, 1953.

(21) Там же, П. 1/1037 гс. ноя. 26, 1952.

(22) Вестник Министерства иностранных дел, 1988. n. 14, с. 39-40.

(23) Roshchin, op. cit., p. 113.

(24) В Наркоминделе. 1922-1939, Интервью с Е. А. Гнедиым, Память n. 5, с. 378.

(25) М. Г· Сергеев, В Бельгии после победы, Дипломатический вестник, 1987, с. 191.

(26) В Соколов, А. Баксберг, Министер иностранных дел Андрей Вышинский, Международная жизнь, июнь 1991, с. 105-116.

(27) Вестник Министерства иностранных дел, 1988. n. 17, с. 41-42.

(28) Н. В. Новиков, Воспоминания дипломата, М., 1989, с. 84.

(29) Who was who in the USSR, Mechuhen, New Jersey, 1972, pp. 122-123.

(30) Дипломатический словарь, 4-ое изд.

(31) Вестник Министерства иностранных дел, 1988. n. 8, с. 59-60.

(32) Дипломатический словарь, 4-ое изд. 及び Московские новости, авг. 30. 1992.

(33) ЦХСД, ф. 4 Оп. 9 П. 34/167гс, июнь 25, 1953

(34) Там же, П. 34/113гс, июнь 20, 1953

(35) Новиков, указ. соч. с. 4-10.

(36) S・チフビンスキー「過去一目撃者の声」『極東の諸問題』一九八九年十月号、一二八―一三〇ページ。

(37) 同上、一三〇ページ。及び、以下の第四版外交辞典の当該個所。Дипломатический словарь, 4-ое изд.

(38) 「外交のトリック か、外交現象か」『極東の諸問題』一九九〇年第十月号、一二四ページ。

(39) 「形成期のグロムイコ」四八―五八ページ。

(40) V. Semyonov, Diplomacy born of the October Revolution, International Affairs, Nov. 1987, p. 100, 及び Дипломатический словаль, 4-ое изд.

(41) А. Е. Богомолов, На дипломатическом посту в годы войны, Международная жизнь, июнь 1961, с. 100-101. 及

び Дипломатический словаль, 4-ое изд.

(42) Дипломатический словаль, 1-ое изд.

(43) Вестник Министерства иностранных ден, 1989, n. 20, c. 72-77.

(44) ЦХСД, Там же, 31/8гс, июнь 3, 1953.

(45) Там же, 34/111гс, июнь 20, 1953.

(46) Дипломатический словаль, 1-ое изд.

(47) ЦХСД, Там же, 51/297гс, дек. 22, 1953.

(48) Там же, 51/299гс, дек. 1953.

(49) Там же, 51/368гс, дек. 23, 1953.

(50) 以下のような学術的な記述にさえ、粛清後の世代の学歴が低いとする個所が見られる。Teddy J. Uldricks, Union of Soviet Socialist Republics, in Z. Steiner (ed), The Times Survey of Foreign Ministries of the World, L, 1982, p. 529.

(51) 五〇年代初頭のモスクワ国際関係大学におけるカリキュラムについては、以下の記述を参照。一九九三年八月には、カリキュラムが国別になっているのは、同大学の以前からの特色だとする意見を、卒業生から頻繁にきくことができた。A. Kazanacheev, Inside a Soviet Embassy, Philadelphia and N. Y., 1962, p. 29. また、同大学の沿革については、以下のパンフレットにある記述を参照せよ。Moscow State Institute of International Relations, n. d. p. 4.

(52) В. Ерофеев, Десять лет в секретариате Наркоминдела, Международная жизнь, авг. 1991, с. 121-123.

(53) 晩年のモロトフは、経験の乏しい外交官しかいなかった当時のソ連では、大使に独自のイニシャティヴを許すわけにはいかず、モスクワにすべての決定を委ねた「中央集権的外交」しか可能性はなかったし、その結果、大きな失策をしなかったと述べている。Сто сорок бесед с Молотовым, Из дневника ф. Чуева, М., 1991, с. 98-99.